

森の 名手・名人

森の名手・名人 平成24年選定

加工部門



木桶製造業

いとう けんじ
伊藤 今朝雄さん
昭和30年生まれ
(長野県上松町)

桶づくりは父が初代で、私が二代目。父は関東で修行を積んで、最終的に桶の材になるサワラの産地、木曽の上松に落ち着きました。木曽は寒さが厳しいために木の成長が遅く、材が細かく締まっています。香り、桶を作るのに適した木が多く

木との付き合い方を
知ってほしい

産出します。昔は山の奥に行かなくても素性のいい木があったものですが、今はほとんど山奥に行かないといい木は残っていません。木が悪いと製品の質も悪くなるので、仕入れる材には気を使います。最近で

「森の名手・名人」とは、森林や山の自然を守り育て、その恵みを暮らしに活かすための優れた知恵や技を受け継いで、模範となっている達人たちのことです。毎年全国から「森の名手・名人」が選ばれ、高校生達による「聞き書き甲子園」に協力しています。

今回の特集では、8人の森の名手・名人の方に、森林や山、地域、文化などにかかる思いや魅力などについてうかがいました。

■「森の名手・名人」とは

毎年、森林とともに生き、古くからの知恵や技術などを受け継いで、模範となっている方を公益社団法人国土緑化推進機構が「森づくり」「森の恵み」「加工」「森の伝承・文化」の4部門から選んで、「森の名手・名人」として公開しています。

平成14年度から昨年までに、1,060人の方々が「森の名手・名人」に選ばれ、伝習された技術や森林の魅力を伝える活動を行っています。

■「聞き書き甲子園」とは

「聞き書き」とは、話し手の言葉を録音し、一字一句を書き起こした後で、ひとつの文章にまとめる手法です。

「聞き書き甲子園」は、全国の高校生が、森や海・川に関わる様々な職種の「森や海・川の名手・名人」を訪ねて、自然と人が共に暮らすための知恵や技、ものの考え方を学んで「聞き書き」として記録する活動です。

平成14年度に林野庁と文部科学省の主催する「森の“聞き書き甲子園”」として始まり、第10回からは「森や海・川の名手・名人」を訪ねる「聞き書き甲子園」として、毎年開催されています。

●聞き書き甲子園ホームページ <http://www.foxfire-japan.com/>

第12回 聞き書き甲子園フォーラム 「私たちが伝えたい、これからの生き方」

聞き書き甲子園の1年間の活動成果を発表し、聞き書きで学んだ人と自然のつながりを未来へと引き継ぐため、2日間のイベントが開催されます。

第1部 3/8(日) フォーラム
『森・川・海の名人が教えてくれたもの』
13:00~16:35(開場12:30) 会場:江戸東京博物館ホール

第2部 3/9(月) シンポジウム+「海の森」探検ツアー
『持続可能なコミュニティ設計
~人も自然も豊かな社会を目指して~』
10:00~15:00(開場9:30) 会場:タイム24ビル5階南会議室・中央防波堤内側埋立地「海の森」

参加費 無料
申し込み 3月3日(月)までに以下を明記の上、聞き書き甲子園実行委員会事務局FAX03-6432-6590またはEメールmori@kyouzon.orgまでお申し込みください。

①氏名、②住所、③電話、④Eメール、⑤所属(高校・団体・企業等)、⑥参加人数(小学生以下の参加がある場合は明記)、⑦参加パターン(A:3月8日のみ、B:3月9日のみ、C:両日)

問い合わせ 聞き書き甲子園実行委員会事務局(認定NPO法人共存の森ネットワーク) ☎03-6432-6580 FAX・Eメール前記



完成した桶

は、国重要文化財の善光寺ぜんこうじの改修に大量の木曽の天然サワラ材が使われたため、材の供給バランスが崩れていて、調達もなかなか大変です。

天然木は厳しい自然の中で育ってきたため、年輪が詰んでいて桶のいい材になります。それに対して人工林で育った木は成長が早いので、年輪が粗く、桶の材にはあまり向いていません。樹齢100年位の人工林材を使う方法も検討していますが、自然の中で

200年、300年と育ってきた木には及びません。

私の所では、樹齢300年以上の天然サワラ材を1年以上天日乾燥させて使っています。1年をかけて日や雨、雪に当ててアクを抜いた後でも、新しい桶にはアクが残ります。桶を何年も使っていくうち、残ったアクも抜けて一番いい状態になります。木の道具は、使う人が育てていくものです。300年もかけて育ってきた木を

使っている桶を、数年でダメにしてしまつては木がかわいそうです。桶は洗った後、陰干しにして乾燥させれば、黒くカビでダメになってしまうことはありません。また、使う際に少し濡らしてやれば、米がくっついてしまうようなこともありません。今は木の道具を使ったことがなく、

全身を使って行う桶づくり作業

使い方を教わっていないため、木との付き合い方を知らない人が多いように思います。木に「ありがとう」と感謝して使う気持ちを知ってほしいと思います。

森の名手・名人 平成23年選定

加工部門



かご作り

ただのつとむ
太々野 功さん
昭和11年生まれ
(滋賀県長浜市)



私が生まれ育ったのは、滋賀県長浜市余呉町の小原地区です。

この一帯には、およそ1,200年前頃から人が住み始めたといわれています。奥深い山村で豪雪地でもあったため、塩以外のほとんどの生活必需品を自給自足でまかなう独自の山村文化

が息づいていました。

そのひとつが、小原かごです。このかごは、ツルや竹ではなく、小原地区の森林に自生するイタヤカエデという木を使って編むのが特徴です。小原かごの製法は、今から800年ほど前の鎌倉時代、都からやってきた皇子が村人達と親しく交流するようになって教えたのが始まりだと伝えられています。しかし、生活の中でかごが使われなくなつたこともあって、代々一家の長男に伝えられたきた技術も次第に失われていき、今では私が唯一の継承者となつてしまいました。

小原地区は丹生ダムの建設計画で水没予定地になり、平成8年頃までに廃村状態となりました。ふるさとが失われた今、生活のほんの一部だったかご作りだけが山村の暮らしを伝える手段となつてしまいました。この伝統を絶

やさないため、

後世に伝えていくのが私の役目だと思い、平成21年に「小原かごを復活させる会」を立ち上げて、私が主任講師となつてかご作りの指導にあたつていきます。



伝統的な技法で建てられた作業小屋

また、昨年6月には私が会長となつて、小原地区に残る美しいブナ林や山村の文化を保全していくため、森林所有者を中心とした「高時川源流の森と文化を継承する会」を設立しました。現在は一帯に残る巨木の計測や看板設置などを行うとともに、小原の集落跡地付近に金具を一切使わず、森林で調

達したツルやカヤなどを使用した伝統的な作業小屋の建設も進めています。伝統を形にすることで、小原地区の文化を継承する人が現れてくれることを願っています。



完成した小原かご

森の名手・名人

森の名手・名人 平成24年選定



ばば たけし
馬場 猛さん
昭和23年生まれ
(福岡県八女市)

自然のものだけを使った
本物の線香を

線香づくりは豊富な自然——水資源と林業の二つがなければできない仕事です。八女地方は線香の原料となる杉粉の産地で、明治末から昭和50年代にかけて林業の副産物として盛んに生産されていました。最盛期は40以上の水車が稼働していましたが、後継者不足

森の名手・名人 平成24年選定



うちの かずよ
内野 和代さん
昭和26年生まれ
(福岡県みやま市)

天然樟脳製造

伝統製法による
天然樟脳へのこだわり

天然樟脳づくりは私で5代目になります。

昭和59年から4代目だった夫とともに樟脳を作り始めました。平成22年6月に夫が亡くなり、一時は工場を閉鎖。しかし、夫の四十九日に樟脳をお供えしようと、有志の方にお手伝い

わかない線香のできあがり。

線香づくりを始めたのは、大正8年製の水車を再建した平成20年からです。それまでは杉粉やタブ粉の製粉だけを仕事にしていた。しかし、市販されている線香は天然のものとは違う色や香りをしていて、私が作った杉粉やタブ粉にどんな

化学物質が混ぜられて製品化されているのかがわかりません。線香には食品のような成分表示がないので、安全だといわれても不安が残ります。そこで自然の原料だけを使った昔ながらの線香を作ることになりました。線香の作り方は誰も教えてくれな

ただいて、約1か月後に樟脳づくりを再開し、平成23年4月に5代目樟脳師に就任しました。

夫が亡くなって最初の樟脳づくりをしたのは真夏。樟脳は季節ごとに採れる量が変化し、通常、真夏はそれほど採れません。ところが、この時はびっくりするほどの量の樟脳が採れて、不思議なものを感じました。

天然樟脳は、初代からおよそ150年間、昔ながらの道具と製法で作られ



水車小屋内での作業風景

かったので、全て独学です。試行錯誤の連続で、最初の半年は失敗ばかりしながら、ようやく現在の製法にたどりつきました。

自然のものだけを使った本物の線香を通して、水車場の杉の香りや山里の暮らしを感じて頂ければと思います。

シャーベット状の結晶となった組成樟脳



けています。九州地方ではかつて樟脳づくりが盛んでしたが、合成樟脳の輸入が許可された昭和37年に専売制が終わると徐々に衰退し、私の所が最後の工場となってしまったこともありました。今はここ4〜5年の間に、九州内で新しく樟脳づくりを始めた工場が3か所あります。

樟脳づくりにかかる期間は約一週間。原料のクスノキをチップにした後、蒸釜で蒸します。釜に入れる水の

量や火の強さによって採れる樟脳の量や香りが決まるため、チップの色や火の音、蒸気の香り等に気を配りながら作業を行います。樟脳の成分を含んだ蒸気を冷却して組成樟脳を取り出し、圧搾機で樟脳油と樟脳に分けます。

樟脳の成分が抜けたチップは燃料となり、燃やした後の灰は鹿児島島の伝統的な菓子・灰汁巻きの原料にも利用されています。また、樟脳油は最近アロマオイル等としても人気があります。

1回の製造に使う6トンのチップからは、約25kgの樟脳しか採れません。しかし、これが伝統製法による天然樟脳です。今後とも量産体制を取るつもりはありません。

伝統製法による唯一の生産者として樟脳を作り続けることを時に重荷に感じることもあります。これからも自然が作る製品の価値を知ってもらえるよう努力し続けて行きたいと思えます。



組成樟脳を圧搾し、油分と水分を分離して完成した天然樟脳

森の名手・名人 平成24年選定

森の恵み部門



しいたけ栽培

ふじわら かずのり
藤原 司徳さん
昭和3年生まれ
(広島県三次市)



健全な山や森林は
人が作るもの

私の家では、先祖代々伝わってきた山林や農地を受け継いできました。昔、私の住んでいた一帯では、炭や薪づくりが盛んでしたが、灯油・ガス・電気に取ってかわられてしまい、木材が使われなくなってきました。パルプなどの価格も下がり、このままではい

けない、どうにか有効活用して価値を高めることができなにかと考えたのが、しいたけ栽培を始めたきっかけ、昭和42年頃のことです。

当初はしいたけ栽培を始めるのはそれほど難しいことではないと思っていたのですが、実際にはそうではありませんでした。思いついたことは必ず実行しましたが、結果は良かったり悪かったりで、失敗も沢山しました。

もともと、私の所有する山にはナラだけでクヌギはありませんでした。たまたま数本のクヌギが見つかり、ナラのほだ木と一緒にしいたけを栽培してみると、収穫が多く、質も良かったため、それからはクヌギを植林して育てるようになりました。試行錯誤を繰り返して作った原木しいたけをおいしいこととて貰えることは何よりも嬉しいことです。

また、私の山では、昭和28年頃からスギやヒノキの植林も始めました。植えた木々は、成長するに従って高く伸びて、下からは枝葉が枯れ上がり、太陽を遮って地面に下草が生えなくなりやす。そして、下草が生えない山に雨が降れば、表土が流れ、木の根も張らなくなってしまう。

私の植林したヒノキが35年生の木となった頃のある日、雨に続いて激しいポタン雪が降りはじめると、雨に濡れたヒノキの枝葉や幹に雪が付着し、その重みで木が折れたり、根元から倒れる「根返り」を起こしてしまいました。折れた木は次の木へと倒れかかり、被害は連鎖的に拡大。その後も雨が降る度に根返りが起き、露わに



藤原さんの作った原木乾しいたけ



山の斜面に並べられた原木しいたけのほだ木

なった表土が雨に流れて更に被害は大きくなりました。

植林した木は、枝葉や幹の成長に比べて根も張っていくものだと思っていたのですが、倒れたヒノキを見て、根張りが少ないのにびっくりしました。この経験から、人工林は勝手にできていくものではなく、作るもので、人が手入れをしなければ、健全な森林や山はできないのだと気づきました。このことがあって以来、常に先んじた山の手入れを心がけています。

森の名手・名人

森の名手・名人 平成23年選定



森の恵み部門
にし ようこ
西 要子さん
昭和16年生まれ
(佐賀県佐賀市)

山菜料理は山からの
メッセージ

私たちの地元はおよそ85%が山林や原野です。私たちにはこの環境を離れての暮らしは考えられませんし、学校や仕事等にとつては不合理な立地ではありませんが、それを含めて愛おしく思いながら過ごしています。

佐賀県の中でも山林の多い地域に住む私たちが、率先して山や森林のことを考えなければならぬ、でも「林」が「業」になつてくるとはいいたくない現状で、労働面では弱者である女性の私たちにできる事は何だろう。そう考えたことがきっかけで、平成8年2月に佐賀市婦人林業研究会を立ち上げました。活動内容は講演会や視察研修による林業知識の向上や山林保有者の意識調査、そして山菜等の林産物の生産と研究です。発足当初の名称は富士町婦人林業研究会でしたが、平成17年に富士町が佐賀市と合併したのを機に名称を改め、都市部に暮らす方も仲間にして一緒に活動を続けています。

山菜料理に注目したのは、嘉瀬川下流域で結成された富士町の親林交流隊の皆さんが私たちの地元を訪れることになり、どんな歓迎をしようかと考えたことがきっかけです。みんなで山菜

の天ぷらやお浸し等を持ち寄ったところ、これが大変喜ばれました。これをひとつの契機として、山菜料理を出すお食事処「森の香 菖蒲ご膳」が株式会社として設立されました。これは山を背負って暮らす私たちと山を眺めている下流域がともに森林の恵みを頂くことで、自然への畏敬の念を持ち、動くお金の嵩では計り得ない「山住みのよろしさ」を知って貰うための山から町に向けた私たちのメッセーjです。

自然の営み、天然のサイクルを謙虚に受け止め、その恵みである折々の旬の食材を化学調味料を使わない薄味の料理として提供し、山里の風景の中で森林を渡ってくる風の香りとともに味わっていただきたいと思



折々の森林の恵みを素材にした菖蒲ご膳

だけが広がっていったため、空師と呼ばれるようになったようです。私の祖父も空師でした。直接仕事を習ったわけではありませんが、幼い頃から周囲の人たちが祖父の仕事を通じて聞かされてきました。中学校を出た私は繊維関係の会社に就職し、

営業担当になりました。しかし、性格的に向いていなかったことや繊維不況等もあり、無理して背伸びをしているような仕事にすっかり疲れてしまいました。そんな時に思い出したのが祖父のことです。木や山を相手の仕事には人間関係の難しさはありません。幸い私は

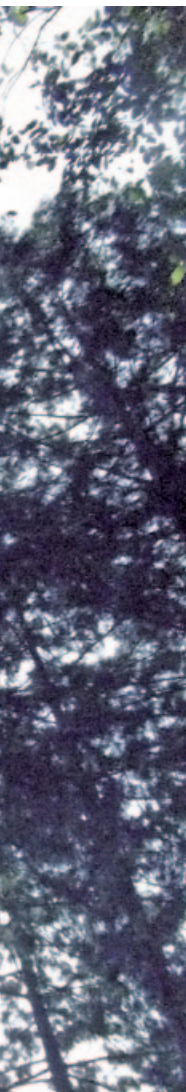
森の名手・名人 平成23年選定



森づくり部門
おざわ しょうぞう
小澤 章三さん
昭和14年生まれ
(埼玉県入間郡越生町)

尽きない
森林の魅力

昭和54年から昨年3月に廃業するまでの30年余り、空師をしていました。空師というのは、そのまま伐り倒すと家や農地等を壊してしまうような場所にある木に登り、高く伸びすぎた幹や枝を切り落として伐採する仕事です。木に登って仕事をする人の背後には空



だけ

た

腕力が強く、片手で木につかまっ
 てることもできましたし、高いところも
 平気でした。サラリーマンをしながら、
 休日には山の仕事をしていたこと
 もあって、木を伐ることも慣れてい
 ました。高所での作業には危険が伴
 いますが、それだけに収入もよいのが
 魅力的で、家内には大反対されました
 が、押し切って空師になりました。
 それから独学で仕事を覚え、様々な
 場所で空師として働いてきました。木

は一本一本が全て違うため、同じ仕事
 はありません。毎回工夫を重ねて木を
 伐るのは楽しい作業でした。
 廃業後も葉草の研究や果樹の栽培
 に挑戦したりと、森林や山への興味は
 尽きません。どれだけ長く仕事で付き
 合ってきたても、まだまだ自然界には魅
 力が一杯です。皆さんにも、ぜひ森林
 や山に興味を持ってほしいと思ってい
 ます。

足につけた金具「つめ」と命綱の
 胴縄だけを頼りに高く伸びた木に登る



森の名手・名人 平成24年選定

森づくり部門



造林手(枝打ち)

かわうち はくお
 河内 伯雄さん
 昭和23年生まれ
 (宮崎県美郷町)

100年〜200年先を考えた
 山づくり・森林づくりを

私の所では、家の向かいにある約
 100haの敷地で、スギやヒノキを苗
 から作っています。植える苗は1haあ
 たり4,500から5,000本。
 植付けが済んだら下刈り、次いで除伐
 から間伐を経て、枝打ちが終わったら
 木を抜いていきます。抜いた木は皮を

剥き、磨いて乾燥させて、亀裂のでき
 ないように芯まで背割を入れます。自
 分が育てた木は、とにかく手をかけ
 て、最高の状態で送り出してやりたい
 と思っています。

林業の面白さ、自然のすばらしさ
 は、手をかければかけただけの見返り
 があるという点です。木は作ってさえ
 いれば売れるという古い考え方ではな
 く、実際に木を買ってくれる人、使っ
 てくれる人の事を考え、枝打ちをし、
 手をかけて、山づくりをしていけば、
 山や森林は応えてくれます。

きちんと枝打ちをした材は、内装
 に使っても工業製品に引けを取りませ
 ん。通気性に優れ、健康にも良い木
 の内装は消費者にも受け入れられま
 す。また、念入りに枝打ちをし、十数
 年かけて育てたヒノキの海布丸太や、
 山で皮を剥き、そのまま寝かせて、自

然のカビをつけた錆丸太、樹皮をはが
 し、表面を滑らかに磨き上げた磨き丸
 太等、樹齢にあわせて消費者ニーズに
 あった材を生み出していくとともに、
 100年〜200年先を考えた山づく
 り・森林づくりを進めていけば、必ず
 地方にも道は開けると思っています。

山では森林浴ができるし、空気や水
 もきれいです。お金を追い求める生活
 を望んでいるのでなければ、自然は生
 きていくのに十分なものを与えてくれ
 ます。地方には都会にはない素晴らし



愛用ののこぎりと鎌

い暮らしがあります。自然を守り、地
 域を活性化していくためにも、地方に
 人が残ってくれるような山づくりが必
 要です。国や自治体には、ぜひ地域を
 支え、自然に寄り添って生きていこう
 とする人を支援する施策をお願いした
 と思います。



木の成長を見るのは何より楽しい